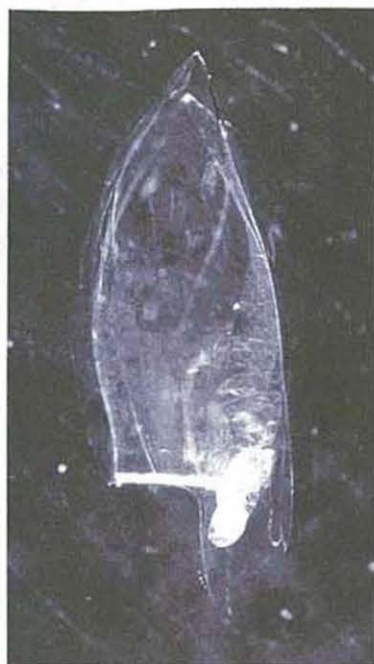


ネジレクラゲ



まだ若いネジレクラゲ

久保田 信

66



ネジレクラゲは名前の通り、傘の表面をうねる稜線(りょうせん)が、あたかもねじれたようになっている。しかし、この個体はまだ若いので、そのような特徴的なねじれがまだ弱い。ねじれの後半部は表面に細かい歯を多数備えるが前半部にはあまりな

い。管クラゲの仲間であるネジレクラゲは、日本産の大きな個体で6ミリの程度の体長である。他の種類とよく似ていて、基本的には水切り効率をよくしたロケット型である。ロケット型の傘が泳鐘(えいしよ)で、とても堅い寒天質でできているので、プランクトンネットで手荒くひいても壊れない。この傘は生きている時は透明だが、死ぬと白く濁ってしまう。泳鐘の中は空洞になっているので、そこに吸い込んだ海水を傘(=泳鐘)の拍動で勢いよく噴射して、素早く移動する。五角錐(すい)形の泳

鐘上に突き出したねじれた稜線だと、移動の時にかなりの抵抗となり、おそろく、らせん状に回転して進まないもので水切りがあまりよくないように思われる。しかし、種類として生き残っているのだから、この形にはなんらかの利点と機能があるのだろう。

ネジレクラゲはわが国の暖かい海域の外洋に生息するが、飼育が難しく生活史はよく分かっていない。有性生殖は、母体からより小型のロケット型の成熟クラゲ(ユードキシッド)を遊離させて行う。画像の右下にある体囊(たいのう)の下端に、白い塊として見えているのが摂食用の部分で、生きがよいと糸のようにな長く伸びる。この糸に旗を多数なびかせるように、餌を捕まえるポリプ状の部分がつくられている。

加えて、有性生殖用のユードキシッドもここに多数つくられる。収縮していて分かりにくい、この個体にはユードキシッドがまだできていない。(京都大学准教授)